



磯谷 博史 影響を泳ぐ

#009 徳山 拓一 形が影に従い、音が響に応じる

この度のGinza Curator's Roomでは、森美術館キュレーターの徳山拓一氏を迎えて、「形が影に従い、音が響に応じる」展を開催します。

本展では、アーティストの磯谷博史氏が、思文閣所蔵の大正・昭和期に描かれた日本画および戦後の前衛陶芸集団である走泥社の作品を「素材」や「道具」に用いて制作した新しい作品シリーズと、それぞれの元となった作品とを合わせて展示いたします。

Artists

磯谷 博史 小早川 秋声 鈴木 治 竹内 栖鳳 田中 一村 土田 麦僊

思文閣銀座

2024.9.2 Mon. — 9.14 Sat. (日曜休廊)

10:00 — 18:00

Curator's Statement

形が影に従い、音が響に应じる

徳山 拓一

本展は、アーティストの磯谷博史が思文閣の所蔵品の中から、大正から昭和にかけて描かれた日本画と、戦後に生まれた前衛陶芸集団である走泥社の作品を、「素材」や「道具」として用いて制作した新しい作品シリーズを紹介します。

本展のタイトルは因果関係を示す言葉としての「影響（ようこう）」に着想を得ています。ここには「影が形に従い、響が音に应ずるように、関係が密接で速やかに相応する」という意が込められています。本シリーズは、作品を「素材」や「道具」として用いることで、本来なら影響を受けるのみの「影」や「響」である後人の磯谷が、先達の「形」を従え、「音」を应じさせることの可能性に挑んだ、大胆であり示唆に富んだ思考実験だといえます。

Curator

徳山 拓一

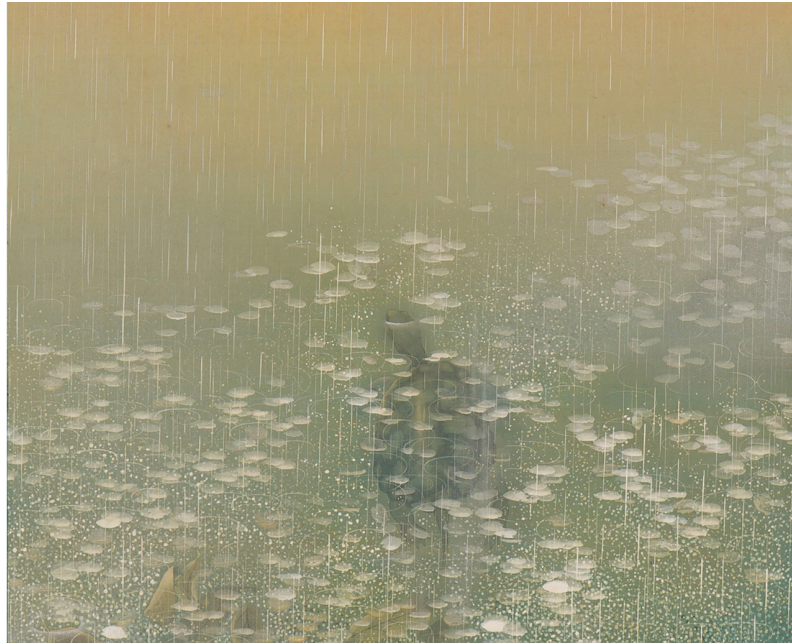
京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAを経て、2016年4月より森美術館アソシエイト・キュレーター。京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAでは、ガイド・ヴァン・デル・ウェルヴェ個展「無為の境地」、奥村雄樹個展「な」（2016年）、アピチャップン・ウィーラセタクン個展「PHOTOPHOBIA」（2014年）がある。森美術館では「SUNSHOWER: 東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」（2017年）、「MAMプロジェクト025：アピチャップン・ウィーラセタクン+久門剛史」（2018年）、「六本木クロッシング2019：つないでみる」（2019年）、「地球がまわる音を聴く：パンデミック以降のウェルビーイング」（2022年）、「シアスター・ゲイツ展：アフロ民藝」（2024年）などを担当。東北芸術工科大学客員教授。

Artist

磯谷 博史

東京都生まれ。写真や彫刻、ドローイング、それら相互の関わりを通して、時間や認識の一貫性への再考を促す作品を制作する。主な個展に、「動詞を見つける」（小海町高原美術館、2022）、「『さあ、もう行きなさい』鳥は言う『真実も度を超すと人間には耐えられないから』」（SCAI PIRAMIDE、2021）、主なグループ展に「Constellations: Photographs in Dialogue」（サンフランシスコ近代美術館、2021）、「L' Image et son double」（ポンピドゥー・センター、2021）、「六本木クロッシング2019：つないでみる」（森美術館、2019）など。





小早川 秋声 細雨蕭々 (部分)

思文閣銀座

〒104-0061 東京都中央区銀座5丁目3番12号 壹番館ビルディング

<https://gcr.shibunkaku.co.jp/access/>

TEL: [03-3289-0001](tel:03-3289-0001)

営業時間: 10:00 — 18:00

日曜休廊

本企画に関するお問い合わせはtokyo@shibunkaku.co.jpまでお願いいたします。



SHIBUNKAKU
GINZA

思文閣